

③6

結びとして

―先人の知恵―

都築弥厚が発想した用水計画は、石川喜平の測量図を経て、五十数年後に岡本兵松と伊予田与八郎によって実現した。矢作川の水を碧海台地に活用する計画は、江戸時代からの夢であった。小松林や雑草で覆われたやせた土地はでこぼこして数千から万にも及ぶ池があったのだが、それがまたたく間に田畑に生まれ変わっていった。

農業を中心とした碧海台地の可能性、将来の発展に期待して、有能な人材が安城に集まった。そして、その人材が育つてくると、安城は、大正末期～昭和初期のころには「日本デンマーク」と呼ばれる農業先進地として知られるようになったのである。

まず、農民の精神的なリーダーとして登場したのが山崎延吉であった。安城農林学校初代校長だった彼は、農林学校を全国に知れ渡る学校に育てた。そして、そこには優れた人材が集まった。この農林学校を創立するのに最も力を尽くしたのが岡田菊次郎であった。さらに明治用水、農業指導機関など政治的な実践を、ときには私財を投じてまでも実現していったのである。

農業が産業として発展してくると、それぞれの分野で活躍するリーダーが出てきた。初代農業組合長といわれる岩瀬和市は、安城駅の近くに更生病院を誘致した。そのころ、駅周辺にはほとんど人家はなく、農産物を運び出す施設が鉄道沿線に建てられた。

県の農事試験場が誘致されると、品種改良

や農機具改良が進み、岩槻信治のイネなどが稲作を大きく進歩させた。多くの農民は、こうした研究に協力し、鶏、野菜、くだものなどの農産物の品種改良にかかわった。

―矢作川の水の恩恵―

明治用水が地下にもぐると、碧海台地に住む人々の目に触れることも少なくなった。農業用水から工業用水に変化しつつあるが、矢作川の水は、いっそう大切な資源となっている。かつては豊かだった水量も、現在は下流域でも消費するため、昔の面影はない。

小松林の広がる荒野だった碧海台地を、現在、わたしたちが知るすばらしい土地に変えたのは、多くの人々の知恵と、涙と汗の努力にほかならない。

碧海台地は、今後どうなっていくのだろうか。これからも多くの人々の知恵と努力があれば、これ以上の発展は望めない。

文 田中みのる



都築弥厚像
(弥厚公園／和泉町)



岡本兵松像
(石井辻原遊園／石井町)



山崎延吉像
(安城農林高校／池浦町)



岡田菊次郎像
(JAあいち中央本店／御幸本町)

※本号をもちまして連載を終了します。